

群 教 セ	G05 - 08
	平 28. 261 集
	美術一中

材料の特徴を生かしながら、 自分の思いを表現できる生徒の育成

—イメージを形に置き換える
「試しの活動」と「操作活動」の導入—

特別研修員 濱田 大作

I 研究テーマ設定の理由

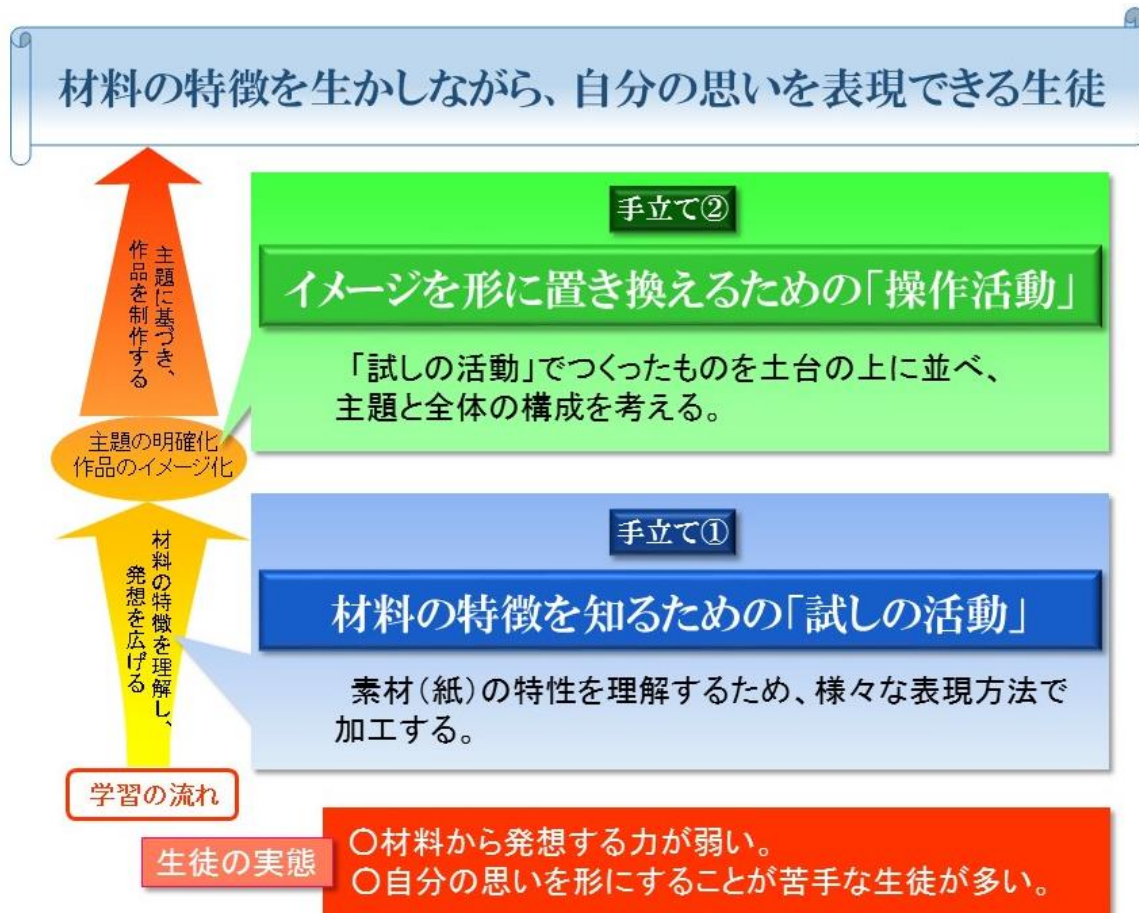
はばたく群馬の指導プランには、群馬県の美術科の課題として「材料の特徴を生かして発想すること」とあり、材料の特徴を基に発想する能力を高める指導が求められている。その中で中学校では、解決に向けて伸ばしたい資質・能力として「材料の特徴を十分生かして発想を広げることができる」ことを重視している。

本校の生徒の多くは授業に意欲的に取り組むことができている。ただ、制作に対して、「失敗したくない」や「間違えてしまったら嫌だ」という思いが強く、自己表現することに消極的になっている生徒が見られる。また、一つの材料にじっくりと向き合いながら形を生み出していくことに苦手意識を持っている生徒も見られる。その背景には、題材の中で材料と向き合う機会が少なく、材料の特徴を捉えること、制作を通して捉えた特徴を生かせるようにすることについての指導が不十分だったからではないかと考える。

そこで、「材料の特徴を生かしながら、自分の思いを表現できる生徒の育成」を研究テーマに設定し、「材料の特徴を知るための試しの活動」及び「イメージを形に置き換えるための操作活動」を手立てとして研究を進めることとした。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

材料の特徴を生かしながら主題を追究できるようにするために、下の二つの活動を手立てとした。

手立て1

材料の特徴を知るための「試しの活動」の時間の設定

手立て2

イメージを形に置き換えるための「操作活動」の設定

手立て1は、題材で主に扱う材料に十分に触れさせ、一つの材料から様々な表現方法や多様な形を発見していく活動である。この活動を題材の導入で行い、主に扱う材料の特徴を捉えていく。扱う材料は、表現方法が多様にあったり、生徒にとって初めて向き合う材料であったりする場合は効果が高い。

手立て2は、「試しの活動」でつくった作品から自分の心に留まったものを選び、並べて全体の構成を考える活動である。様々な表現方法でつくった形をどのように構成していくと、自分の思いに合うのかを実際に手を使って操作しながら考えていく。そして、この過程で自分の主題を明確にしていく。教師は、数や大きさ、向きなどの視点を提示して考えさせることで、より表現意図に合った構成を見付けられるようにしていく。

このように、「試しの活動」を行い、扱う材料を十分に理解した上で、「操作活動」によって全体の構成を考えながら主題を明確にし、主題を効果的に表すことへ転換する。この後の表現意図を明確にして主題を表現することで、材料の特徴を知り、自分の思いを表現していく力を育成させていくことにつながると考える。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 「試しの活動」として、材料と向き合う時間を設定したことは、今まで気が付かなかった表現方法を知り、多様な形を発見することができ、材料の特徴を捉えることにつながった。その際、生徒が取り組む特徴的な表現方法を基にキーワードとして提示し全体で共有したことは、多様な形を生み出すための手掛かりになった。また、この活動で多様な形を見つけたことは、様々な表現から自分の表したいものを選択し、並べて構成を考える「操作活動」へとつながることが明らかになった。
- 「操作活動」として「試しの活動」でつくった作品を並べたり組み合わせたりさせたことは、手を使って操作しながら作品全体の構成を考え、自分の主題を明確にさせるために必要だったと言える。また、数や大きさ、向きなどの視点を提示して構成を考えさせたことは、生徒自身の表現したいものに近付けるための有効な手立てとなった。その際に、具体例を示しながら全体の構成の仕方を説明したことで、各自の作品構想に生かすことができた。

2 課題

- 「試しの活動」でつくる作品が、後の作品構想の「操作活動」へとつながっていくため、扱う材料に十分に触れながら、いかに多様な形を生み出せるかが重要となる。また、「試しの活動」では、しっかり材料と向き合いながら様々な発見をさせるために、教師の言葉掛けや教材の提示の仕方を工夫する必要があることが分かった。捉えた材料の特徴を効果的に生かして表現した数名の生徒の作品を全体に紹介したが、さらに発想を広げ、自分の作品に取り入れられるようにするには、短時間でも互いの作品を見合う場面をつくる必要があった。
- 「操作活動」では、単に並べるだけでなく、自分の表現意図を効果的に表すにはどのような構成にしていくかを考えさせるために、参考作品を提示し、作者の表現意図が分かるような説明が必要だと分かった。また、自分と向き合いながら主題を明確にしていくため、表面的な美しさを追究することに陥らないように、自己をじっくり見詰めさせる言葉掛けや個別指導の工夫が必要である。

実践例

1 題材名 「自分に吹く風を表そう」（第3学年・1学期）

2 本題材について

本題材は、紙の特徴を生かしながら多様な形を発想し、自分の心に吹く「風」を紙で表現するものである。身近な材料に十分触れながら形を生み出し、自分の心を「風」と置き換え、内面を抽象的な立体作品として表現していく。本題材では、コピー紙、ケント紙、和紙の3種類を扱う。材質の違う紙に触れさせることで、それぞれの紙の持つ強さや柔らかさ、暖か味などを感じ取りながら表現意図に合わせて選択できるようにしたいと考える。生徒が、材料とじっくり向き合うとともに、自分を見詰めながら思いを表現していくことをねらいとした。



図1 教師がつくった参考作品

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	紙の特徴を十分生かしながら多様な形を発想し、主題を基に表現の構想を練り、自分の心に吹く風を抽象的な立体で表現することができる。	
評価 規 準	関心・意欲・態度	紙を使った自己の内面の表現に関心を持ち、主体的に制作に取り組もうとしている。
	発想・構想の能力	自分なりに捉えた紙の特徴を基に、主題に合った紙の形や作品全体の構成の仕方を考えて、作品の構想を練ることができる。
	創造的な技能	紙の特徴を生かしながら、主題を効果的に表す形を見いだしたり、新たな表現方法を工夫したりして表現することができる。
	鑑賞の能力	作品に込めた表現意図を分かりやすく伝えたり、友達の作品の思いや表現の工夫などを見付けたりすることができる。
過程	時間	主な学習活動
課題 追 究	第1・2時	<ul style="list-style-type: none"> 「試しの活動」で、1枚の紙から様々な表現方法や多様な形ができることを知る。 「試しの活動」をしながら浮かんでくる自分の表現のイメージを発見する。
	第3時	<ul style="list-style-type: none"> 「試しの活動」でつくった作品を並べたり組み合わせたりしながら、主題と全体の構成をはっきりさせる。
	第4・5時	<ul style="list-style-type: none"> 主題を基に紙で形をつくり、土台に接着させて作品を制作する。
まとめ	第6時	<ul style="list-style-type: none"> 作品に対する思いを話したり、友達の作品のよさを発見したりする。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全6時間計画の第1～3時に当たる。第1・2時は「試しの活動」を行い、材料である紙に向き合い、多様な形を発見する。第3時は、「試しの活動」で制作した作品を基にして、漠然と持った思いをより明確にし、効果的に表すための構想を立てながら少しずつ主題を見付けることが中心となる。そこで、自分の主題を効果的に表すための手立てを以下のように具体化した。

手立て1 材料を自由に加工して、多様な形を発見する「試しの活動」の時間の設定

紙1枚から様々な表現ができ、多様な形を生み出すことができることを実際に手を動かしながら体感する。また、コピー紙、ケント紙、和紙の3種類の紙を扱い、それぞれの特徴を理解する。

手立て2 「試しの活動」でつくった作品を土台に並べながら作品全体の構成を考える「操作活動」

「試しの活動」でつくった多様な形から自分の心に留まる作品を選び、土台となるボードに並べ、数や大きさ、並べ方などに着目しながら作品全体の構成を考える。

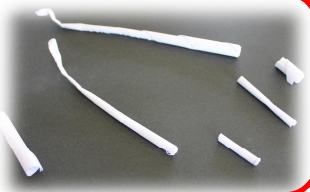
4 授業の実際

(1) 第1・2時の「試しの活動」

第1時では、コピー用紙を自由に加工して多様な形を発見した。生徒は今までの経験を基に、「切る」や「折る」、「丸める」を中心に形を考えていた。教師は、特徴的な加工を施している生徒の作品を多く全体で紹介して、紙1枚でも様々な表現方法があることに気付かせた。その結果、次第に「ひねる」や「ちぎる」、「組む」などへと加工方法が広がっていった。一方で、一つの表現方法を集中的に試してつくる生徒も数名見られた。第2時では、ケント紙や和紙も加えて試しの活動を行い、材質の違いを味わわせた。図2は抽出生徒のものであり、「自分で考えた作品」(実線の吹き出し)、「友達の考えから取り入れた作品」(点線の吹き出し)、「第2時につくった自分に吹く風になりそうな作品」(2重線の吹き出し)へと発展していることが分かる。


① 授業の始めの頃につくった形 (丸める)

最初に「丸める」という表現方法で細く丸めた棒状の作品を数本つくった。

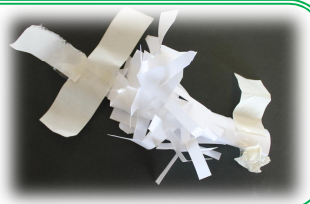


② 友達の作品を参考にしてつくった形 (ちぎる)

数名の生徒作品の紹介を終えた後に「ちぎる」という表現方法でつくった作品。



コピー紙と和紙を組み合わせて、自分に吹く「風」になりそうな形をつくった。



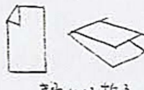

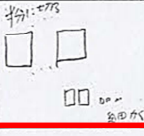

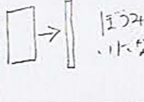
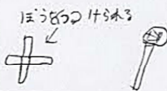
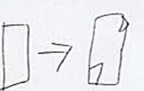

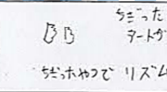

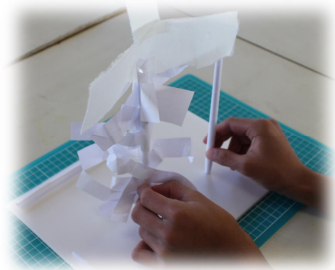
発見した加工方法	簡単な形	さらに発展すると...
折る コピー紙	 きまいに折る	 じばら折り!
ちぎる	 ちぎる	形を作る 
丸める	 丸める	 丸めて作る
ひねる	 ひねる	
ちぎる	 ちぎる	 ちぎったやつで 作る
組む	 組む	

図2 第1・2時の「試しの活動」での抽出生徒の変容

「切る」や「丸める」、「ひねる」などの言葉を提示したことで、同じ表現方法でも多様な形を生み出し、試しの活動による発想を広げることができた。振り返りカードの記述からも、「紙1枚でもこんなにいろいろな形が作れることを知った」という感想を書いている生徒が多数だった。

(2) 第3時の「作品の構想を練る活動」

第1・2時の「試しの活動」でつくった作品を土台となるボードの上に並べ、試行錯誤しながら自分の主題を生み出し、作品の構想を練る「操作活動」を行った。そして、並べた作品を見ながらアイデアスケッチにまとめ、自分の主題をどのように効果的に表すかを言葉も書き込みながら整理した。教師は、制作の過程を示す参考資料を提示しながら、数や大きさ、向きといった視点を提示した。



抽出生徒は、まず、前時につくったコピー紙と和紙を組み合わせた作品を眺めていた。始めの頃は、自分に吹く風の形が思い付かず悩んでいたが、教師が「今の自分はどうな気持ちが強いのか?」や「その気持ちを表す形は今までつくった中にあるかな?」などと問い掛けたことで、少しずつ形を見付け出すことができ、繰り返す度にボード上に並べて構成を確認する姿が見られた。

図3 第3時の「操作活動」の様子

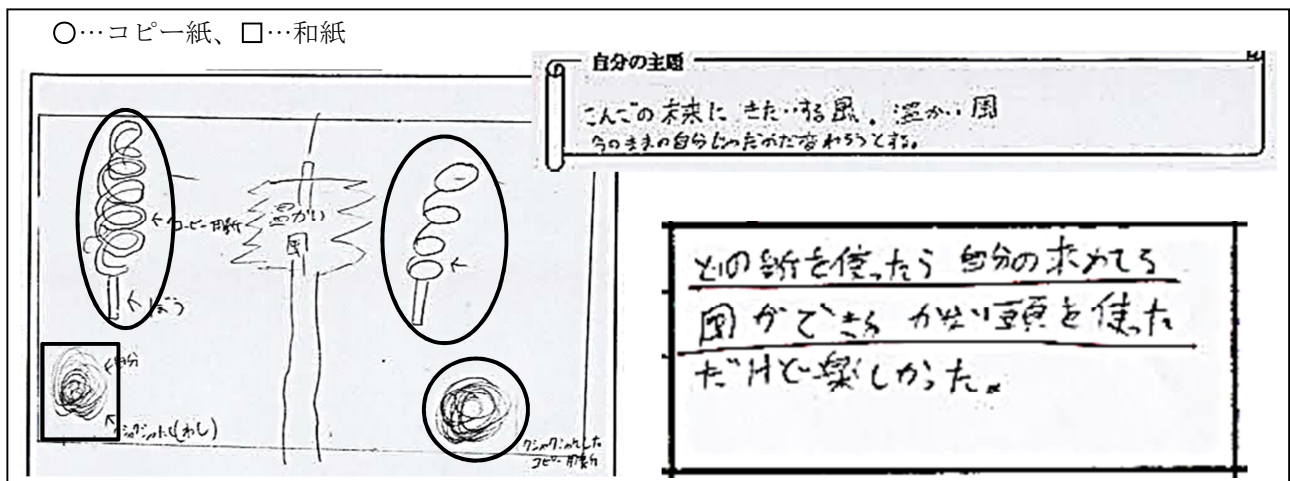


図4 「操作活動」後のアイデアスケッチ（左）と振り返りカードの記述（右）

図4の内容から、「今のままの自分ではだめだ」という思いを和紙をくしゃくしゃにして表そうと考えている様子が分かる。コピー紙、ケント紙、和紙のどの紙を使えば、自分の表現したいものに近づくのかを考えている。今後の未来に期待する風を表すために、同じ形でも材質を変えて対比を表現していたり、期待感を出すために、上に向かって伸びていく様子を表現することができた。

(3) 第4・5時の「制作の活動」

前時の構想とは少し変更したが、アイデアスケッチをこまめに確認しながら自分なりに工夫して制作していた。中央にある高さのある形は、「温かい風」である。この形は第3時に構想していたとおりであった。ただ、前時で考えた和紙をくしゃくしゃにしてつくる形は、制作する中で材質をケント紙に変え、形も変更した。この形は、自分自身を表している。主題を基に、どの材質が自分の表現意図に合っているかを考えながら制作し、完成させることができた。

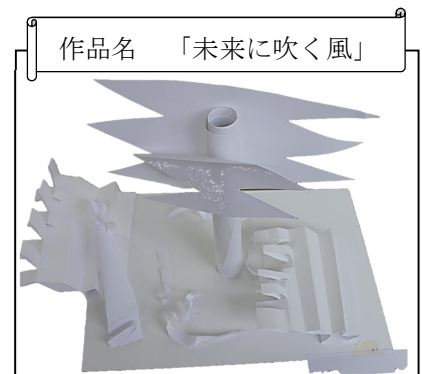


図5 抽出生徒の完成作品

5 考察

紙を使ってどのような加工ができ、どのような形ができるかを試す「試しの活動」では、普段何気なく使っている材料とじっくり向き合いながら多様な形を見付けることができた。普段は自分の活動になかなか自信が持てない生徒も、友達作品を参考にしながら自分の作品に取り入れることができた。一方では、一つの表現方法を発展させて自分なりに工夫する生徒も多く見られた。多くの生徒が授業後の振り返りに「紙1枚でこんなにたくさんの方ができると知った」や「紙の材質によって作品が変わることが分かった」などの感想を記述しており、紙の特徴を十分理解し、その後の構想段階につなげていく導入段階の工夫が有効に働いたことが分かる。

「試しの活動」でつくった作品をボード上で並べさせ、全体の構成を考えさせる場面では、数や大きさ、向きなどを変えた具体例を提示し、どのように並べると自分の表現意図に近づくのかを考えさせた。その結果、構成の仕方を知り、自分の主題を再確認しながら全体の構成を考えようとする生徒が多く見られた。コピー紙、ケント紙、和紙から自分の表現意図に合う紙を選んだり組み合わせたりして、材質の違いを作品に生かす生徒も多く見られた。また、ボードの形を自分の表現意図に応じて変形させる生徒も見られたが、操作活動の初期段階で作品全体を考える視点の一つとして提示し、考えさせることができれば、さらに自分の思いに近付けられるような生徒が増えたと考える。自分をしっかり見詰めながら構想を立てさせる際に、全体や個への言葉掛けを工夫することも必要である。このように、資料の提示や個に応じた言葉掛けをさらに改善、充実させて、表面的な美しさだけでなく、自己の内面を効果的に表現することに向き合わせていきたい。